

# 作品《井Ⅲ》

「境内アート小布施×苗市 2015」出展の参加型アート作品について

山貝 征典

## i III

About the interactive art work “i III” exhibited in KEIDAI ART OBUSE 2015.

*Masanori YAMAGAI*

### Abstract

This paper describes the interactive art installation “i III” exhibited in KEIDAI ART OBUSE 2015. We consider the art works, it was discussed with emphasis on site-specific factors that concert with the precincts space. And pick up an overview of the audience participation. Outreach activities through the production of works participation of the audience, the precincts space of as alternative space, also discussed such as the art-environment in contemporary art.

キーワード：現代美術、参加型アート、オルタナティブ・スペース、アウトリーチ、小布施

Keywords：contemporary art , interactive art , alternative space , outreach , obuse

### 1. はじめに

本論では、2015年春に筆者が清泉女学院大学の学生3名とともに参加した、現代アートの展覧会「境内アート小布施×苗市 2015<sup>1</sup>」にて発表した作品《井Ⅲ》における、観客参加型作品の概要について論じる。あわせて観覧者の作品制作参加を通じたアウトリーチ活動、アートにおけるオルタナティブ・スペースとしての境内空間、現代アートの芸術環境などについても考察する。展覧会の概要や成り立ち、前回作品などに関しては、昨年に清泉女学院大学人間学部紀要にて発表した筆者論文<sup>2</sup>を参照いただきたい。

### 2. 《井》から《井Ⅲ》への継続と展開

昨年出展した作品《井》において、参加型アートの仕掛けや教育効果を生み出した経験を生かし、今年も同展へゼミ所属の学生とともに参加することになった。

2014年の冬ころからミーティングをスタートさせ、《井Ⅲ<sup>3</sup>》作品のコンセプトづくりや現地への視察、展覧会記録映像をチェックするなど準備を進めていった。うまくいった部分は引き継ぎながらも、仕掛けや造形をオリジナルなものに仕上げ新たな表現にすることは難しい作業となったが、ブレインストーミングを継続し学生とともにアイデアを出す作業を続け、空間イメージ構成、参加型表現における工夫などを徐々につめていった。



図 2-1 2014年度の作品《井》(部分)

【参加型作品《井Ⅲ》におけるコンセプトや構想】

- ・観客の参加は1工程で終わるような、シンプルな依頼とする
- ・子どもやお年寄り、家族連れなどが気軽に参加しやすい工夫
- ・ワンフレーズで説明できるような作業内容
- ・参加に時間がかからないこと、長くても3分以内程度
- ・作業時に絵の具などで来場者が汚れないように配慮
- ・参加してくれたかたにお礼に飴をあげる<sup>4</sup>
- ・側から見て何をやっているかすぐにわかるような明快さ

【造形や作品構成におけるアイデア】

- ・境内において比較的遠くからみても映える鮮やかな色彩の立体
- ・昨年度の旧仏旗の5色に対して、新仏旗（国際仏教色）の5色を使用する
- ・御柱やオベリスクのような上方へ向かう力の表現
- ・終わりも始まりもないような輪廻的感覚
- ・境内空間にあることで意味が発生または増幅するもの
- ・上記に示したような思想や背景が、作品からわかりやすく表出しない軽さ・明るさ



図 2-2 原寸大模型制作の様子



図 2-3 着彩イメージの習作

【観客に参加してもらうための主たる工程】

- 1 : H2000×W500×D500mm の白色の四角柱立方体のそばに、参加者に立ってもらう
- 2 : 参加者の身長を測り、その高さの位置を仮止めする
- 3 : 赤・黄・青・樺の4色から好きな色を選んでもらう
- 4 : チェックした高さをおおよそ水平に約20mm幅に紙テープでマスキングする。
- 5 : 横軸に着彩する、希望があれば観客に少し塗ってもらうことも可
- 6 : マスキングテープを剥がす
- 7 : 選んでもらった色と同じ色の飴をあげる

アイディアスケッチ展開や模型の制作をする中で、当初検討していた立体の高さ 1800mm でダンボール模型を制作し屋外に配置したところ、上方への伸びがなく美しさに欠けていたために高さを 2000mm へと変更した。また着彩のシミュレーションを行いフリーハンドにて筆で直に塗ってみたが、「手くせ」のようなものが感じられクールさが出ずイメージと違い、マスキングテープを使用し機械的に塗るほうがよいとの考えに変わった。色帯の縦幅はおおよそ 18mm から 20mm とした。立体は四角柱であるため、会期 2 日間の各午前・午後に対し 1 面を割り当て、最終的に合計で全 4 面が着彩される。昨年度の来場者数データから割り出し、1 面に対して最大で 50 人の観覧があるとして、少なすぎず多すぎない程度に色面が生み出される設定にした。立体の高さは 2000mm としたため、身長が 2 メートルを超える観客が来場した際には下段にループする。例えば 2 メートル 3 センチのかたであれば、下から 30mm の地点を着彩位置として採用する予定としていた<sup>5</sup>。

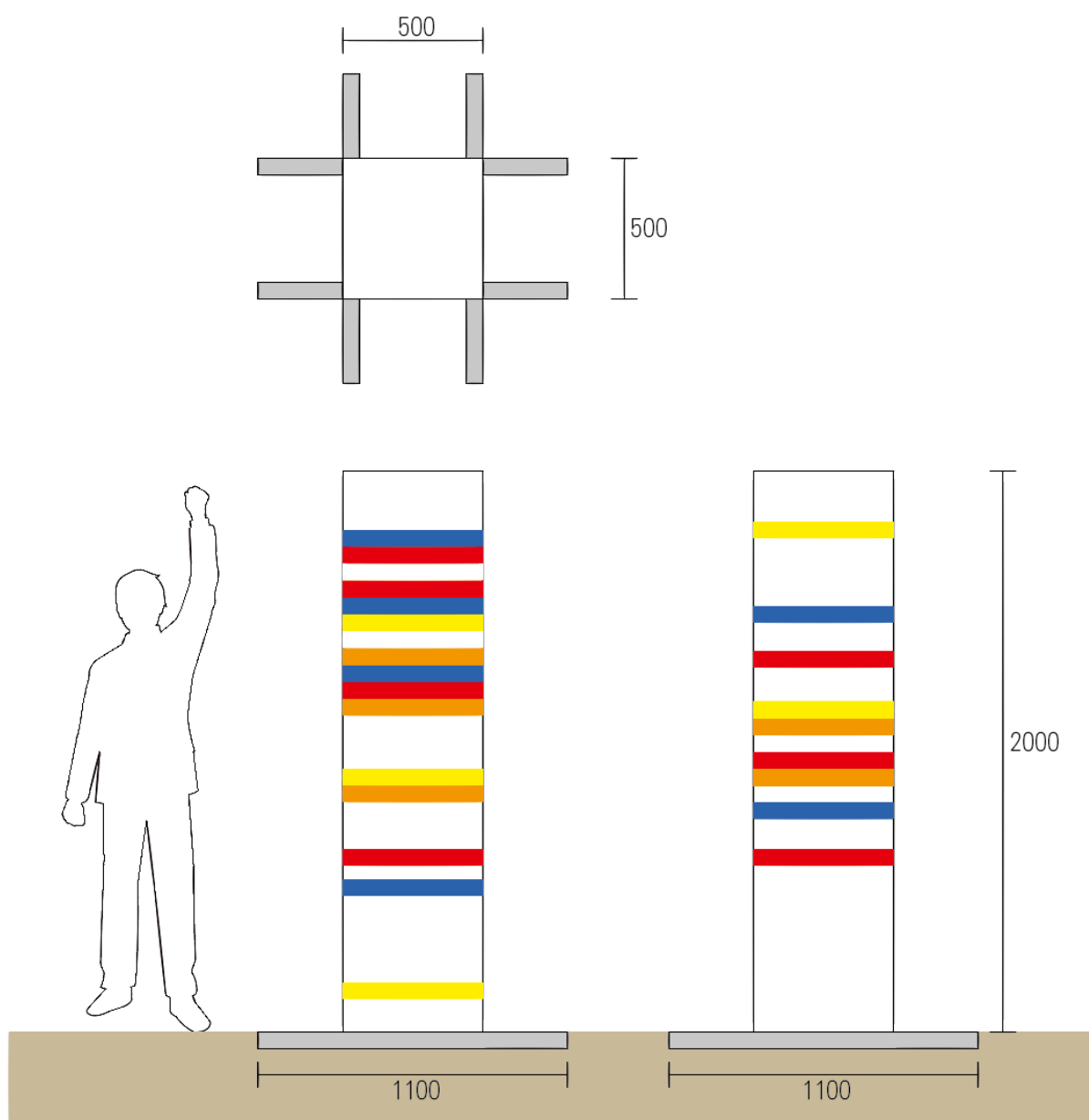


図 2-4 作品《井Ⅲ》三面図および着彩のイメージ

### 3. 色選択のコンセプト

着彩していく色の選択は、昨年同様に寺の境内空間と呼応するサイト・スペシフィック<sup>6</sup>な要素を重要視して検討した。その上で、前回の作品《井》で採用した旧仏旗の5色「緑・黄・赤・白・紫」を基準としたパステルカラーではなく、今回は新仏旗（国際仏旗）の5色「青・黄・赤・白・樺」をそのままビビッドな配色で使用した。

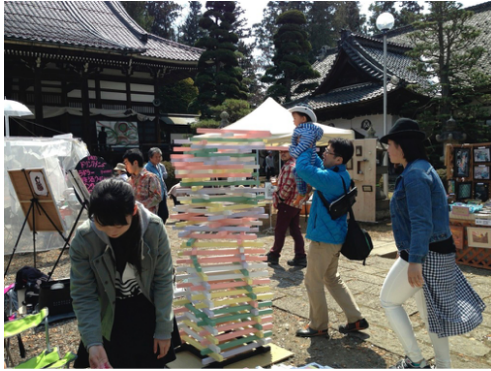


図 3-1 2014年の作品《井》の配色  
「緑・黄・赤・白・紫」のパステルカラー



図 3-2 2015年の作品《井Ⅲ》の配色  
「青・黄・赤・白・樺」のビビッドカラー

作品の色面ボリュームやストライプに着彩が増えてゆく様、遠くから見た時の映えかたなど考慮し、比較的是っきりした強い色のほうが似合うと判断したためである。

昨年、旧仏旗の5色を作品にそのまま使うと素直すぎて、境内空間ではいやらしく感じるのではないかという懸念を感じたが、トーンを変更してパステル調にすることでクリアできた。今年の配色における「現在の日本では、青と樺（オレンジ）の入った新仏旗の配色は仏教・寺院の空間を想起しにくいのではないか」という疑問に関しては、このすぐに仏教感が伝わりにくいことが好都合に働くと考えた。あまりにもストレートに和やアジア、仏教的なイメージを想起させる配色では、境内ではその造形が似合いすぎていやしくなる。造形的にもビビッドではっきりした色彩の立体をイメージしていたので、樺色が入ることもプラスに働いた。



図 3-3 旧仏旗と新仏旗の色彩の比較





図 3-4.5.6.7.8.9 境内空間で作品が出来上がっていく様子

境内を通過して苗市やクラフト市へ移動する来場者は、その道すがら観客参加型アート制作の様子が目に止まる。前の参加者が作業をし学生とコミュニケーションを取っていると、特に説明しなくても興味を示し次々と連続して参加してもらえるようになる。多くの人はこの作品が目的で来場している



わけではないが、わかりやすくポップな色彩を持つ造形と、身長を測ったりマスキングテープをはがしたりしながら楽しむ子どもたちにつられ、自然にアートへの参加へと導くことができた。

#### 4. 現代アート分野でのアウトリーチ活動

作品《井Ⅲ》では、現代アートにあまり関心がない来場者に作品制作に気軽に参加してもらい、魅力や新しい発見、楽しみを伝えるアウトリーチ活動としての要素を持たせた。寺を参拝に来たかた、境内を散策しているかた、またクラフト市や苗市での買い物などが主たる目的の来場者などに、積極的に声をかけて進めていった。

現代アート表現の中でも特にコンセプチュアル・アート<sup>7</sup>は、その背景にある作者のねらいが、ある程度の美術の知識や歴史理解、社会と美術の関係、芸術表現とは何かという思想などと不可分なものも多い。これらは普段から現代アート界をある程度知り親しんでいる人たち以外を寄せ付けず、ともするとせっかくのアート鑑賞の機会から観客を遠ざけ、「よくわからない」という感想を持たせてしまうこともある。もちろん、わかりやすさや荘厳さ、いわゆる「絵のうまさ」などだけが表現の評価軸にはならないことは、特に20世紀以後の美術の多様性から広く認識されている。しかし現代美術、現代音楽、現代詩、現代舞踊などの、同時代性そのものが表現要素に必要な芸術表現分野では、「好きなように感じて、好きなように観ればいい」という鑑賞への入り口の示しかたでは初心者にはハードルが高く、その魅力や本質が広がっていかないものも少なくない。筆者が現代アートを主として取り扱う美術館<sup>8</sup>に勤務していた時にも、団体のツアーで訪れたり、友人に誘われてなんとなく来場したいわゆる一般のかたへの普及活動や解説にとっても苦労した経験がある。「意味不明だ」「どうせ素人にはわからない世界だから見たくない」「美術って、絵の事じゃないのか」という固定観念を持ち、現代アートへ拒否感を持つ観客は、まだまだ多いのが現状である。

美術分野におけるアウトリーチ活動は、近年美術館や博物館などの教育普及プログラムでも積極的に行われている。アウトリーチ (outreach) は元々、福祉分野での地域への貢献、医療分野での医師の往診などにあてられていた言葉であるが、美術の分野では「美術に興味をあまり持っていない人たちへ向けて美術活動を普及し、体験してもらおう」ことを指し示すキーワードとして使われている。的場は「厳しい経済環境において、芸術文化を創造・享受する環境が影響を受けつつある中で、それぞれの文化施設の中には、生き残りをかけて様々な工夫を行っているところもある。その代表的なコンセプトは、「地域密着型」ないし「市民参加型」である」と述べている (的場, 2003)。家族や友達同士で身近な場所で参加できる美術ワークショップや、そこまで目的意識を強く持っていなくても楽しめ、自然と現代アートに対して肯定的な印象を持ってもらえるような普及活動が今後さらに必要とされていくだろう。

境内アート小布施×苗市展における作品出展規定に「インスタレーション等、空間を生かした展示



図 4-1 子供たちが参加する鑄金ワークショップの様子、境内空間ならではの雰囲気が楽しい

を優先します。お申込時に、作品の概要、展示方法の希望をお知らせ下さい。展示場所の下見会を開催します。寺院空間を生かした表現を期待します。寺院の空間を生かすため、原則としてテント使用は禁止します<sup>9</sup>」との指示がある。本展でのアート作品に必要とされるものは、オーソドックスに絵画や彫刻を鎮座させ厳かに鑑賞させるというものよりも、ある程度イベント性が高く直感的に楽しみが伝わり、参加型でコミュニケーションが誘発されるようなものが求められていることがわかる。この規定は、逆に本作品によるアウトリーチ活動が有用にはたらく理由にもなった。半田は「美術館が公共サービスとしていかに熱心に広報しても、実際に目の当たりにするまでは、その力を伝えることは容易ではない。つまり作品とその出会いの場を館外に設定することが、最も有効なアウトリーチとなる」と述べている(半田、2010)。本展覧会のように、美術館やアートセンターなどではない、一見関係ない場所で突然予期しないかたちでアートに触れることができる仕掛けは、本来アウトリーチを必要とする層に働きかけるのに有効となる可能性が高い。



図 4-2 糸鋸亭ナルカリによる  
造形アートパフォーマンス

## 5. オルタナティブ・スペースとしての境内

1980年代以降、現代アート作品を展示・表現するオルタナティブ・スペースと呼ばれる場所が生まれ注目されている。アート分野におけるオルタナティブ・スペースは、元々は美術作品を展示し発表するような場所ではない建物や施設をそのまま活用またはリノベーションして、ギャラリーやアートスペース、活動拠点として利用していくものである。廃校になった学校や、使用されなくなった倉庫やビルなどを再活用するものが多く、美術だけでなく音楽や演劇なども混ざった多様な芸術分野によって運営されるものもある。またギャラリーや展示空間がある以外にも、アートセンター的に事務機能や教育普及活動を行える場所、市民の活動スペースを有するなど文化・芸術活動のバブとなる機能を持ち、新しいかたちの公民館的な場所としての魅力も持っている。起こりとしては、1969年及び70年にマンハッタンのグリーン街98番地と112番地に登場した、非営利目的の小ホールが最初の「オルタナティブ・スペース」とされるという論考<sup>10</sup>がある(暮沢、2009)。オルタナティブには代替、もう1つの選択、代わりとなる、異質な、型にはまらない、などの意味があり、ロック・ミュージックの分野でのオルタナティブ・ロック<sup>11</sup>(オルタナ)の言葉のほうがより広く認知されているだろう。

日本におけるオルタナティブ・スペースとして近年特に注目されているものに、アーツ千代田3331がある。2005年に閉校した東京都千代田区立練成中学校の校舎を改修、2010年6月にオープンした施設である。合同会社コマンドAが運営する民設民営の形態で、美術家の中村政人が統括ディレクターを努めている。「アーツ千代田3331(3331 Arts Chiyoda)は、アーティスト主導、民設民営の参画、領域横断のスタイルを旨とし、東京と日本各地、また東京と東アジアのハブとなる「21世紀型オルタナティブ・アートスペース」です<sup>12</sup>」と施設解説にもあるように、新しいかたちのアートセンターとして活動を行っている。



図 5-1 アーツ千代田 3331 外観、ホームページ [www.3331.jp/](http://www.3331.jp/) より

アーツ千代田 3331 では現代アート作品の展示だけでなく、地域の伝統的行事や祭り、町内会的な活動を活性化させ、文化・芸術を結びつける活動も行なっているのも、その魅力の一つとなっている。2015年5月には企画展「神田祭 - 江戸・東京のひととまち」を開催した。千代田区神田周辺に現在も残る祭の歴史資料や写真展示とともに、まち歩き、お囃子の体験講座、動く山車制作ワークショップなど、地域とのつながりを強く感じる取り組みを行った。これらの活動は、オルタナティブ・スペースならではの広がりや多様性、現代アートの周辺へ気軽に参加できる雰囲気をつくることに成功している。

境内アート小布施×苗市の開催場所である玄照寺は、天正年間開創の古刹である。寺は古くから寺子屋としての教育機能、戸籍の管理などでの役所的機能、会合をするための公民館的機能、子どもたちの遊び場、祭や行事を行うためのニュートラルな広場機能など、現代のオルタナティブ・スペースが注目し有しようとしている機能を、もともと持ち合わせていた場所でもある。町内や集落に必ず1つあるような、誰でも平等に利用でき集まれる寺や神社のような空間が、美術やその他文化活動における貴重な場所であり、アウトリーチ活動にも有用である。玄照寺の芦澤住職も「お寺には『檀家さんだけをお相手していればいい』という考えもありますが、私はそうは思いません」「普段から地域の若者にロックバンドの練習場としてお堂を貸し出したりしていましたが、カラオケ大会をしたり、新人歌手を呼んだり…<sup>13)</sup>」と、まさに現代におけるオルタナティブ・スペースと言ってもいい空間をつくり出している。この雰囲気や思想が、多様なジャンルを巻き込んでにぎわいを創出しながら、境内で現代アートの催しを行う素地になっていったのだろう。



図 5-2 本堂の内部にもアート作品が展示され、自由に見ることができる

## 6. おわりに

2014年の作品《井》では、本展覧会への初めての参加で経験がなく手探り状態だったため、それが逆に功を奏して、アイデアに荒い部分もあったが迷うことなくプロジェクトを展開できた。対して2015年の作品《井Ⅲ》では、昨年の造形や仕掛けなどの比較的成功の経験があったからこそ、逆にコンセプト立案や造形をまとめるにあたって難しいと感じるところが多かった。やはり去年はこうだっ



たからと比較してしまい、いらぬ思索が入り込んでしまうために起こるものだろう。空間の構築や観客参加のオペレーションなど全体を通してはうまくいったが、勢いやアート全体の表現力としては、やはり《井》のほうがうまくいったのかもしれない。

作品への参加者から後日聞き取りを行った中に「現代アートというものに触れる機会は今までほとんどなく、なにか特殊なものと思っていた。しかし参加してみて、なんだかよくはわからないけれど元気になった。むずかしくなくて、楽しんでいいんだということを知った」という声があった。《井Ⅲ》は観客参加可能で軽いこと、またポップで親しみやすいことを重要視しており、このようなものは現代アート表現の中のほんの一端に過ぎない。しかし入り口としてこれをきっかけに、現代アートと銘打った展覧会でも作品でも、避けることなく観たり触れたりすることにつながれば幸いである。本論を執筆中にも、2016年春に発表を予定している作品《井Ⅳ》のブレインストーミング、参加型アイデアの展開をすでにはじめている。経験値を重苦しくなく受け継ぎ、新しい経験をもたらず発想に結びつけ、作品として成り立たせたい。

【《井Ⅲ》作品データ】



展覧会名：第12回「境内アート小布施×苗市 2015」

会場：玄照寺（曹洞宗陽光山） <http://www.gensyoji.jp/>

住所：〒381-0203 長野県上高井郡小布施町大字大島 90

会期：2014年4月18日（土）から19日（日）まで

タイトル：井Ⅲ

出展作品番号：A-07

作家名：清泉女学院大学山貝ゼミ（教員：山貝征典／学生：小林春菜、高橋香衣、峯村優子）

作品形態：立体、参加型

本体寸法：H2000×W500×D500mm

素材：白色合板にアクリル絵具で着彩

着彩内訳：コバルトブルー、ブライトレッド、ブライトイエロー、ブライドオレンジ



【註】

- 
- <sup>1</sup> 2015年の「境内アート小布施×苗市」の主催者は玄照寺奉賛会および境内アート×苗市実行委員会。2015年4月18(土)・19(日)の2日間にわたって開催された。<http://keidai-art.com>
- <sup>2</sup> 山貝征典「作品《井》」第11回境内アート小布施×苗市2014」出展の参加型アート作品について『清泉女学院大学人間学部研究紀要 第12号』清泉女学院大学、pp.53-63、2015
- <sup>3</sup> 昨年の《井》および本年の《井Ⅲ》が、境内アート小布施×苗市に出展した美術作品で、間の番号である《井Ⅱ》は、《井》に参加した学生がべつに実施したアート・プロジェクトの名称として使用した。
- <sup>4</sup> 同註2、p.72
- <sup>5</sup> 実際には2メートルを超える身長を観客は来場せず。
- <sup>6</sup> その場に固有な表現。現代アート作品で近年多く見られるもので、作品を展示・設置する場所や地域の歴史、風土、気候などと切り離すことができない特徴を持つ。基本的にはその作品を他の場所に移動して展示を行ったりすることはなく、作品が設置された場所に行き鑑賞することが要求される。
- <sup>7</sup> 概念芸術。代表的な作家としてマルセル・デュシャン、オノ・ヨーコ、ジョセフ・コーススなどがあげられる。
- <sup>8</sup> 十和田市現代美術館。2008年に開館。青森県十和田市の官庁街通りに面したアートセンターで、白い箱状の部屋が敷地に点在する建築は、西沢立衛の設計によるもの。
- <sup>9</sup> 「第13回 境内アート小布施×苗市」作品公募チラシ出展規定より
- <sup>10</sup> 暮沢剛巳「オルタナティブ・スペース/Alternative Space (現代美術用語辞典1.0)」artscape、[http://artscape.jp/dictionary/modern/1198274\\_1637.html](http://artscape.jp/dictionary/modern/1198274_1637.html)、2009年1月15日
- <sup>11</sup> 1980年代のアメリカでの商業的にも成功したメジャーシーンのロック音楽への反発から起こったもので、1970年代以前のロックミュージックへの回帰を志向しているものが多い。主流派の表現との対比で生まれ存在した分野なので、ジャズやヒップホップなどというように、特定のジャンルを指すものではない。
- <sup>12</sup> 「アーツ千代田3331」HP施設説明より、[www.3331.jp/](http://www.3331.jp/)、2016年2月6日閲覧
- <sup>13</sup> 曹洞宗宗務庁・丹青社 編『禅の風』第36号、水曜社、pp.34-35、2011

【参考文献】

- 増山尚美「コミュニティ・アートにおけるアウトリーチ活動について」『北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要 第2号』北海道浅井学園大学、2002、pp.91-101
- 的場康子「アウトリーチ活動の意義・課題についての一考察 ―現代における芸術文化の社会的役割―」『Life Design REPORT 2003.2』第一生命、2003、pp.26-35
- 財団法人地域創造「新 [アウトリーチのすすめ] ―文化・芸術が地域に活力をもたらすために」『文化・芸術による地域政策に関する調査研究 [報告書]』財団法人地域創造、2010
- 小林美津江「公立文化施設による地域活性化 ―アウトリーチと社会的包摂―」『立法と調査 2011.11 No.322』参議院事務局企画調整室、2011、pp.86-97
- 青木淳『はらっぱと遊園地』王国社、2004
- 横山勝彦・半田滋男 監修『美術館を知るキーワード』美術出版社、2010
- 熊倉純子 監修『アート・プロジェクト 芸術と共創する社会』水曜社、2014

(受付日：2016年2月19日)